

産婦の看護を体験することの意味 —実習記録の分析から—

青柳美秀子¹⁾ 荒木こずえ¹⁾ 島田祥子¹⁾

要 旨

母性看護学実習において、分娩時の看護を体験することは生命観、倫理観、母性意識を発展させるという点で意義があるという評価の一方、分娩期の看護を体験できない場合や見学できない場合が多くなりつつある。その理由として分娩数の減少や分娩時間と実習時間のタイミングが合わない、産婦の同意を得られない等がある。

2週間という短期間の中で、可能な限り分娩第1期から受け持つようにし、待機室（陣痛室）および分娩室で教員や指導者が、基本的ニーズへの援助と産痛緩和の援助などを共に実践することをとおし学生に指導した。

学生の産婦への看護の内容と感じたことについて、実習記録から産婦の看護を体験することの意味を分析・考察した。見学のみでなく産婦への看護を実践することで、対象の理解を深め、産褥期の母子への看護につなげること、生命や母性について学生自身の考えを深めることができている。すなわち、産婦に具体的に関わることによって産婦と学生との関係性の深まりがあり、この体験は出産観や母性観を育むものであると同時に援助者として人間関係を築く基礎となると考えられる。

キーワード：分娩第1期の関わり 体験の共有 産婦と学生の関係性 母性観

I. はじめに

看護基礎教育における母性看護学実習の展開は、対象を受け持ち分娩から退院まで継続して援助する方法をとる場合と、継続して受け持つことはせずに周産期の看護活動場面を見学し、その意味を考える方法をとる場合などに分けられる。いずれの場合も分娩見学の意義は認識しつつも分娩件数の減少や分娩時間と実習時間とのズレ、産婦の同意を得られない等の理由で分娩を見学する機会は減少しており、また母性看護特有の技術においても産婦の看護においては実施できる項目は少なく見学のみになる傾向がある^{1) 2)}。

現在、実習指導の場において、分娩第1期に援助できた学生は産褥期においても対象理解が深いことを実感している。そこで現在行われている産婦の看護についての実習指導を振り返り、より効果的な指導のあり方を検討することとした。

A短期大学の母性看護学実習における産婦の看護は、待機室（陣痛室）および分娩室での産婦へのかわりや分娩見学をとおして対象の理解を深め、産褥期の母子への看護につなげること、生命や母性について実感したことを自分なりに考えられることを目標としている。基礎教育課程であるため分娩経過のアセスメントや胎児心拍モニタリングは、教員や臨床指導者の説明を受けて理解できるという段階である。基本的ニーズへの援助や産痛の緩和への援助は、教員や臨床指導者と共に実施し、分娩室での実習終了後に振り返りをしながら援助の根拠について考えを整理している。

学生の実習記録からは待機室（陣痛室）や分娩室で産婦にかかわっているときは、「自分に何が援助できるのだろう」「何を援助してよいかわからない」という戸惑いの表現が多かった。しかし、産婦と共に分娩第1期の時間を共有し、産婦の苦痛や頑張る姿から励まされたり、分娩が終了した褥婦から「そばにいてくれて安心できた」などの言葉を聞いて、

1) 川崎市立看護短期大学

産婦のために自分が援助したことの意味に気づくことができている。

学生の体験した産婦の看護を実習記録から分析し、母性看護学実習における産婦への看護を体験することの意味について考察したので報告する。

II. 研究目的

産婦の看護を体験することの意味を明らかにすることにより、母性看護学実習における効果的な指導の資料とする。

III. A 短期大学の母性看護学実習の実際

A 短期大学の母性看護学実習は、領域別実習として3年次に2単位90時間を総合病院産科病棟で行っている。学生は2人一組となり褥婦と新生児を受け持ち、アセスメント・実践・評価という過程を学習する。可能な限り分娩第1期から退院までを受け持つことにしている。しかし実習に入ってからすぐに該当するケースがいるとは限らず、先ず褥婦を受け持ち、平行して分娩期にある産婦の看護を実習する場合もある。また、実習時間内に分娩に至らず分娩の見学ができない場合もある。さらに、周産期の看護全体を経験するため外来において、一人の妊婦の妊娠経過や社会的側面を把握し、インタビューをして妊娠に対する思いや不安について知る機会を設けている。

1. 実習目的

妊娠・分娩・産褥期における母性の特徴を理解し、母子とその家族に必要な看護の基礎能力を習得する。

2. 実習目標

- 1) 妊娠・分娩期にある母子への看護の必要性がわかる。
- 2) 産褥期にある母子を総合的に把握し、看護過程を展開する。
- 3) 妊産褥婦や家族への健康教育にかかわる。
- 4) 母性看護を通して自己の母性(父性)意識を発達させることができる。
- 5) 専門職業人としての態度を養う。

3. 産婦の看護の実際

学生2名が1組となり、学生が受け持つことに同意した産婦を受け持ち、第1期から第4期までの援助を体験する。学生にとって、産婦に接することは初めての経験であり待機室・分娩室では痛みを訴え

る産婦を前に言葉も行動も萎縮してしまう。そのため教員や臨床指導者が、学生のできる基本的ニーズへの援助を促したり、すべての援助を共に行うことからはじめ、徐々に1人で実施していく。分娩の進行に合わせて、その場でアセスメントから実施へのプロセスを同時に行うことは難しいため、分娩経過を教員や臨床指導者が確認し、基本的ニーズへの援助と、主に産痛緩和の援助について意味づけを考えさせながら実習している。

IV. 研究方法

1. 対象

A看護短期大学3年生、4月～7月までの実習が終了した34名に研究協力を依頼し、同意した学生20名である。

2. データ収集方法

実習記録のうち分娩期の看護について記述した部分を「基本的ニーズへの援助」「分娩経過に伴う援助」「感じたこと」の3項目に分けて抽出し内容を分析する。

3. 倫理的配慮

前期実習が終了した学生に対して、文書で協力を依頼し、署名をもって同意とした。その際、研究の協力は任意であること、協力の有無に関わらず今後の学生生活で不利益は全くないこと、情報の保護に責任を持つことを明示した。

V. 結果

1. 学生の実習した分娩時期

学生の実習した分娩時期を分娩第1期のみ、分娩第1期から2期まで、分娩第1期から3期まで、分娩第1期から4期まで、分娩第2期から3期まで、分娩第2期から4期までに区分してみると表1及び図1のとおりで、半数の学生が分娩第1期から4期まで受け持つことができた。

2. 援助の内容と根拠

基本的ニーズへの援助、産痛に対する援助、精神的な援助、分娩進行を促進するための援助などに分類できる。基本的ニーズへの援助は食事・睡眠・清潔・排泄などであった。産痛に対しては呼吸法の指導、腰部や仙骨部マッサージ、温罨法、体位の工夫、

足浴であった。また努責を逃がすことや努責の仕方の指導、足浴や散歩など分娩の進行を促進する援助、さらに励ましやねぎらいの言葉をかけることができていた。

援助の根拠については、分娩室での助産師の産婦への言動や、教員と共に実施しながら指導されたこと、文献で調べたことなどを整理して意味づけをしていた。学生のあげた根拠は分娩労作に備えるため

のエネルギーの補給や産痛を和らげるゲートコントロール説、ドゥーラ効果などであった。

これらは基本的ニーズへの援助、産痛に対する援助、分娩促進への援助、精神的援助に分類でき、産婦の看護の目標である分娩経過を安全に経過でき、かつ産婦にとって安楽に過ごせるための援助に結びついている。（表2-1）表2-2）

表1 分娩時期と学生数

分娩時期	学生数
第1期のみ	3
第1期～2期	0
第1期～3期	4
第1期～4期	10
第2期～3期	0
第2期～4期	3
合計	20

図1 実習した分娩時期

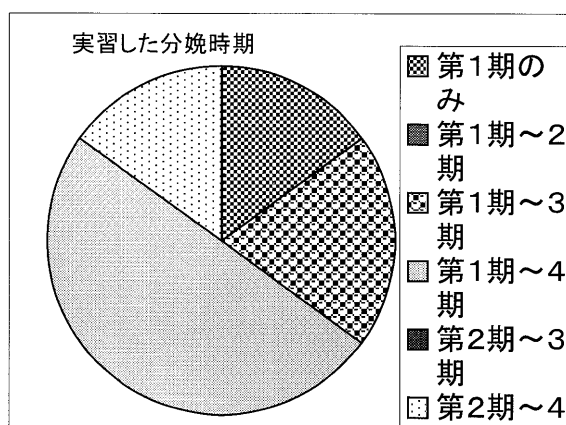


表2-1) 学生の行なった援助とその根拠

<基本ニーズへの援助>

基本的ニーズ	援助内容	学生の考えた援助の根拠
呼吸・循環	・バイタルサインの測定	
飲食	・水分摂取を促す	<ul style="list-style-type: none"> ・分娩労作によりエネルギーの消耗が多い。 ・発汗や体温上昇により口渇感が強い。 ・脱水症状を予防する。 ・甘味のあるものでグルコースを補給し疲労を防ぐ。
	・飲水の介助	
	・食事の介助	
	・食事のセッティング	
清潔	・冷たいお絞りで顔を拭く	<ul style="list-style-type: none"> ・陣痛発作時身体を緊張させ、また発汗が多いので爽快感を得る。
	・全身清拭	
	・顔、首筋を拭く	
	・更衣	
排泄	・排泄を促す	<ul style="list-style-type: none"> ・膀胱・直腸の充満は胎児の下降を妨げる要因であり進行に悪影響を及ぼす。 ・尿の貯留は子宮収縮を妨げ分娩を遅延させる。
	・トイレへの付き添い	
活動	・散歩の付き添い	<ul style="list-style-type: none"> ・散歩は気分転換となり歩行は陣痛を促進する。
体温	・うちわを使って体熱感を和らげる	<ul style="list-style-type: none"> ・爽快感が得られてリラックスする。

表 2 - 2) <分娩経過に伴う援助>

援助の分類	援助内容	学生の考えた援助の根拠
呼吸法	・呼吸法の指導	<ul style="list-style-type: none"> ・分娩進行の時期に合わせた呼吸は分娩進行を促し産婦の安楽にも繋がる。 ・呼吸へ意識を集中することで産痛から意識をそらせる。 ・副交感神経の働きを高めリラックスする ・上体を上げることで重力と娩出方向が一致する。
	・陣痛間欠時に力を抜くように指導	
	・深呼吸の指導	
	・努責の仕方の指導	
	・短息呼吸への切り替えの指導	
	・呼吸法を一緒に行なう	
マッサージ	・腰部のマッサージ	<ul style="list-style-type: none"> ・触れられていることで安心感が得られる。 ・ゲートコントロール理論により痛みの閾値を上げる。 ・痛みから意識をそらす。
	・仙骨部のマッサージ	
	・圧迫法	
温罨法	・下腹部腰部の温罨法	・血液循環を良くし、筋緊張の緩和と産痛の緩和
体位	・安楽な体位の工夫	・陣痛間欠時の安楽をはかる。
	・リラックスできる体位の工夫	
	・努責を逃がす体位の工夫	
精神的援助	・呼吸法が上手にできたときは褒める	<ul style="list-style-type: none"> ・側に付き添うことでドゥーラ効果がある。 ・褒めることで安心感を得るようにする。 ・喜びをもって出産を成功体験として感じられる。 ・頑張りを褒め喜びや幸福感に浸る。 ・今後の見通しを伝え主体的な気持ちを高める。 ・励ますことで第2期を乗り越えられるようサポートする。
	・ねぎらいの言葉をかける	
	・進行状態を伝える	
	・励ます	
	・夫への声かけ（夫立会い分娩）	
分娩促進	・乳房のマッサージ	<ul style="list-style-type: none"> ・オキシトシンの分泌を高め子宮収縮を亢進する。 ・血液循環を良くし子宮筋の活性化をはかる。
	・足浴	

表3 産婦の看護を体験して感じたこと

＜分娩第1期～3期、第1期～4期の産婦の看護を体験した学生＞

- ・陣痛が強くなるにしたがって産婦は耐えていくための気持ち・体力を保ち続けるのがとても大変だと思った。
- ・自分なりにコントロールしていてすごいと思った。
- ・新生児は青白く、自分のイメージと違っていた。
- ・第1期・2期の産婦への声かけは圧倒されてできなかった。
- ・知識としては持っていたけど分娩の進行は雰囲気を感じていくしかできなかった。
- ・産婦が一人で過ごすのは不安だと感じた。
- ・腰部をマッサージして頑張っている産婦さんを見て気持ちが高ぶった。
- ・はじめは緊張してしまったが呼吸法を一緒にして自分も落ちついてきた。
- ・分娩経過が早く自分が考えてきたことは何も行えなかった。
- ・第4期に大量出血が起こり知識を持っていなかったので声かけしかできなかった。
- ・陣痛が急激に強くなりびっくりした。
- ・陣痛に耐える産婦にどう声かけしてよいかわからなかった。
- ・表情や気持ちを観察し一緒に経過をたどり気持ちを共有した。
- ・お母さんが初めて赤ちゃんを見たときの表情が笑顔で印象的だった。
- ・自分にできることはあるのかとまどった。産婦さんに「すごく助かりました」と言われ側に誰かいてくれることが救いになると思った。
- ・産婦の息遣いや言葉で陣痛も変化していることがわかった。
- ・戸惑ったがさまざまなことを見学できた。
- ・いざとなると行動計画を立てられなかった。
- ・産婦は辛そうで精神的にも肉体的にも限界と言う感じだったが新生児と対面したときはとてもうれしそうで満足そうな表情だった。
- ・分娩を見学できてうれしかった。
- ・分娩室の中で自分にできることは何かよくわからずとまどった。

＜分娩第1期～3期、第1期～4期の産婦の看護を体験した学生＞

- ・第1期の産婦の不安に対してなんと声かけしてよいかわからなかった。
- ・安全にリラックスして分娩して欲しいと思った。
- ・分娩室の中で自分にできることは何かわからず戸惑った。
- ・記述なし

3. 産婦の看護をととして感じたこと

挙げられた「感じたこと」をみると、自分自身の感情として、「戸惑い」「どうしてよいか分からない」「新生児はイメージと違った」「圧倒されて声がかけられない」などであった。また産婦へは「何もできなかった」「産婦の息遣いや雰囲気での分娩の進行を感じるしかなかった」と述べていた。産婦に対して感じたのは「すごい」「一人では不安と思う」「新生児を見て満足そう」などであった。そして「呼吸法を産婦と共にすることで学生自身も気持ちが落ちついてきた」「高揚感があった」と述べていた。

「感じたこと」を、見学した分娩時期別に見ると、第1期から産婦に関わった学生は、戸惑いや不安も

あるが産婦との関係が深まり体験を共有でき、学生自身も落ちついてきたという表現になっていた。しかし例数は少ないが第2期から見学した学生の感じたことは戸惑いや不安が記述されていた。(表2)

VI. 考察

母性看護学実習で学生が体験した産婦の看護において、産婦への看護の実践から学生が学んでいること、産婦と学生の関係の深まりの意味の2点について考察した。

1. 産婦への看護の実践から学生が学んでいること

「何を援助したらよいのだろうか」とか「自分にできることは何もない」「何も援助できなかった」と感

じて、声をかけることや手が出せない状態だった学生だが、教員や指導者、スタッフと一緒に行動することをとおして、産婦に声をかけ、援助することができ産婦に近づくことができるようになった。三井は陣痛に苦しむ産婦を前にして学生が戸惑うのは当然であるとし、「指導者は今産婦が必要としている援助を学生に具体的に伝え、手を添えて一緒に援助することが必要である」³⁾と述べている。教員は先ず、どのように援助するかを具体的に示し、一緒に行動することが必要である。学生は安全を保障された環境で体験することから次の主体的援助に結びつくと考える。

また、教員や臨床指導者が産痛の緩和に対してマッサージや圧迫法に加え、足浴や体位の工夫など積極的に苦痛を緩和する方法を取り入れて実施したことは、何も手が出せないと思っている学生にとって今までの実習で学んだ知識や体験を活用できる技術として応用できたと考える。

分娩後に褥婦から、「そばにいてくれたことで安心できた、助かった」と言われ、「側にいることだけでも自分が役立った」という実感を得ることができた。また自分の行った看護を振り返ることで、産痛緩和や分娩促進の援助、ドーラ効果などについて既存の知識を実際の場面と具体的に結びつけて援助の根拠を理解でき、体験を経験に変えることができたといえる。

2. 産婦と学生の関係性の深まり

分娩第1期、陣痛発作が短く弱い場合には、産婦は学生と話をすることができ、自分の希望や依頼すること、感謝の言葉を表現する。しかし陣痛発作が強さを増すと会話は難しくなり、相手に対する配慮をする余裕がなくなる。学生はそういう産婦の姿や、息遣いや雰囲気などから、戸惑いながらも一緒に呼吸法を実施し、痛む場所を聞きながらマッサージする。そのような関わりから、自分をコントロールする産婦の力や苦痛を乗り越えて分娩し、新生児を抱いたときの産婦の喜びに共感できている。産婦にとっては自分を気遣う学生の素朴な気持ちや無事に分娩して欲しいという思いを感じることができ、学生は一人の産婦の人生における大きなできごとの現場に参加し、分娩第1期を共有しているといえる。ここでの行動が見学のみでは、分娩という現象にだけ注意が払われ、分娩するその人（産婦）の存在は希薄

になりがちである。第1期のかかわりの中で学生にとっても産婦にとっても「第2人称であるあなた」(佐伯2004 p.190)⁴⁾という関係になれることに意味がある。佐伯は子どもと周囲の大人との関係の中で子どもにとって重要な他者として「第2人称であるあなた」の存在の大切さを述べている。その子どもの成長発達に意味ある影響をもたらす一般の大人とは異なる深い関心と愛情をよせる存在である。分娩第1期の関わりの中で学生にとっても産婦にとっても相互に「第2人称であるあなた」といえる関係が形成されていくと考える。

布施らは「分娩期の看護はまさに学生にとって全身で感じ、その反応をマッサージという全身を使い援助しその相互作用が学生の出産観や人生観にまでも考える機会となり、さらに看護することの意味を考える機会となっている。」⁵⁾と述べている。産婦との相互作用や「第2人称であるあなた」という関係をつくることは看護を学ぶ学生にとっての人間関係を築くことを学ぶ具体的な場面であり、看護観を育てることに繋がる。そして、人生観や出産観を考える場ともなる。

白井が「分娩第2期だけの見学実習でも学習意欲を高めることは可能であるが、対象との関係性を深めるためには分娩第1期から関わりを持つことが望ましい。」⁶⁾と述べているように、学生にとっては関係性が深まるのみでなく身体的にもエネルギーの消耗や産道の損傷、出血などを実際に見て、分娩という現象を、身体的にも精神的にも乗り越えてきた人として対象を理解できる。産婦に援助できたことは、看護援助全体の一部分であったとしても、分娩を見学するのみでは学ぶことのできない体験であり、母性という対象を深く理解することができるといえる。

VII. 結論

今回の分析・考察をとおして、学生が分娩第1期から産婦に関わることで、基本的ニーズや産痛緩和などの援助をとおして関係性が深まり、学生と産婦は苦痛や喜びを共有していることがわかった。そして1人の女性のライフサイクルのなかの分娩というできごとを相互に有意義なものとして体験する場となっている。

VIII. 今後の課題

今回は対象となる学生の記録の例数が少なく分娩

第1期から産婦に関わった学生と分娩第1期に関わることでできなかった学生との比較はできなかった。分娩第1期の看護の経験をできなかった学生に対してはカンファレンスにおいて体験を共有する機会をもつなどの指導方法について検討が必要である。

実習した日々の感想は分娩に関するものと決めて

いるわけではなく、最終面接やカンファレンスなどで学生自身が"母になること"をどう捉えたかということが表現されることがある。そのため今後は記録以外にも学生の感じていることを表現できる場を検討し、看護観、母性観を発展させていける機会をつくりたいと考えている。

引用文献

- 1) 成田みゆき. 本校における母性看護学実習. 東京医科大学看護専門学校紀要. 第16巻, 1号, 2006, p. 27.
- 2) 前田規子、中尾優子、宮原春美、中島久良. 看護基礎教育における母性看護学実習の展開. 長崎大学医学部保健学科紀要. 第15巻, 1号, p. 63-64.
- 3) 三井美恵子. 母性看護学実習における看護技術の実施状況. 東京厚生年金病院看護専門学校紀要8巻1号. 2006, p. 56.
- 4) 佐伯 胖. わかり方の研究. 初版. 小学館, 2004, 290p.
- 5) 布施明美他. 母性看護学実習における看護体験と学び. よこはま看護専門学校紀要. 2号, 2005, p. 48-54.
- 6) 白井瑞子. 母性看護学実習の内容調査報告. 香川医科大学看護学雑誌. 第4巻, 第1号, 2000, p. 91-99.